

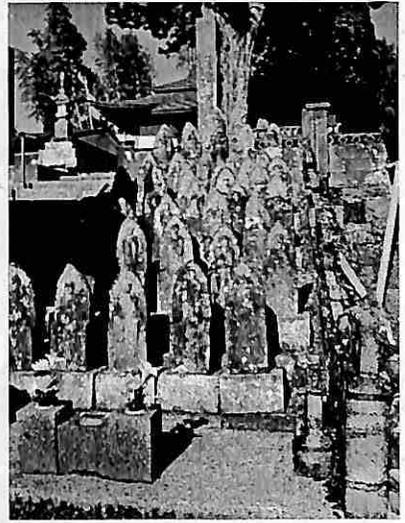
片平の遺跡・遺産



千体地蔵 様

令和3年(2021)2月作成 片山 勇

福王寺



新四国八十八箇所明治 29 年 3 月 鐘楼門 明治 33 年 9 月 仏像九十体 懸燈 明治 33 年



三宝荒神祠



足手荒神社 正面に卍の陽刻文



地藏菩薩 2 体



弘法大師像 笠石にアの種子
元禄 13 年 (1700)



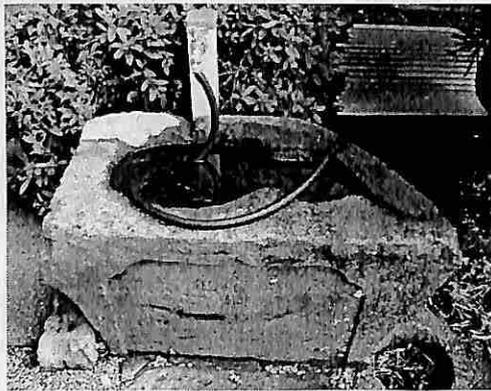
馬頭観音 大日如来 火伏地藏
元禄 13 年 (1700)



淡島大明神像 2 体



宝篋印塔 塔身四面に
タラーク・アクの種子
天保十三年四月



水盤(手洗鉢)



高野槇

懸燈
明治 33 年



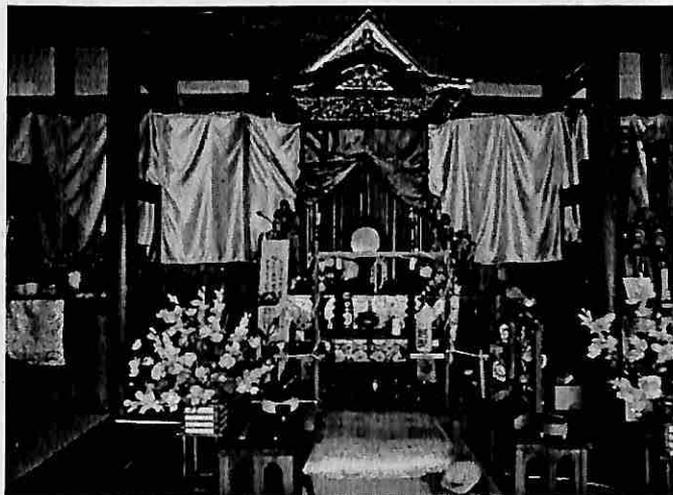
福王寺全景



納骨堂西側 S51 納骨堂建設時に移設
 板碑3基 墓碑か 1体に「了空浄定信士」の銘
 地藏3体 墓碑の供養のためか



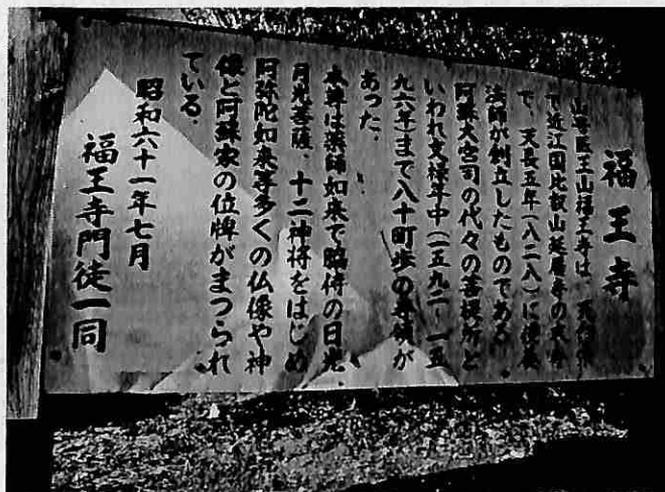
木造不動明王立像二軀 羅童子 制伽羅童子



日光菩薩 本尊薬師如来坐像 月光菩薩



木造阿弥陀如来像 阿蘇家大宮司神像3体



惟豊 惟将 惟種 位牌8基 住職位牌12基

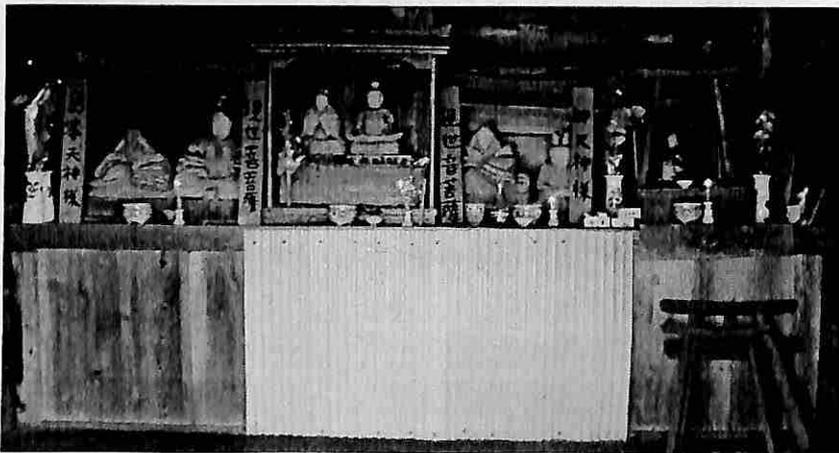
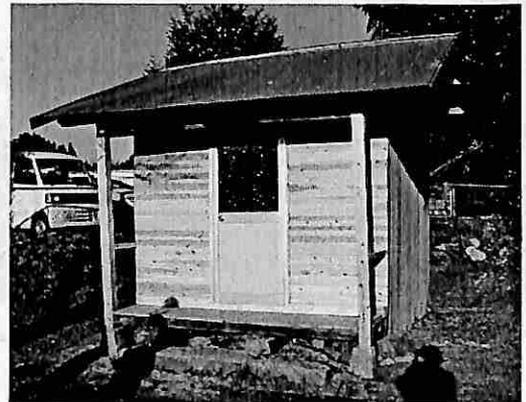
福王寺

山号医王山福王寺は、天台宗で近江国比叡山延暦寺の末寺で、天長五年（八二八）に俊養法師が創立したものである。阿蘇大宮司の代々の菩提所といわれ文禄年中（一五九二―一五九六年）まで八十町歩の寺領があった。本尊は薬師如来で脇侍の日光月光菩薩、十二神将をはじめ阿弥陀如来等多くの仏像や神像と阿蘇家の位牌が祭られている。

かつては片平北側山の中腹小西領時代、愛藤寺城代弥平次の兵火で焼失。寛文三年（1663）豪堅法印現地に再興。常寿院弘海が改築、十乗坊弘全のとき嘉永元年完成。

天神様

2019.11.30
改築



神名不詳



天神像



神名不詳



狐に乗った稻荷神像

祭り 初午 (二月の最初の午の日)

華蔵寺跡



1号基壇



2号基壇



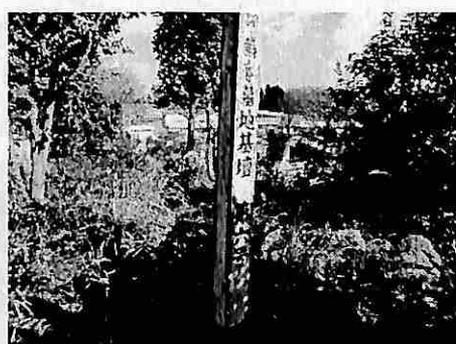
3号基壇



4号基壇



5号基壇



6号基壇



宝塔 5号基壇
塔身四面にアク等種子。



宝塔 塔身四面円相にア等種子。1号基壇の中
口光院殿神儀位
天正十一天癸未年十二月上旬
(1583)



板碑 (逆修塔) 1号基壇の北側
銘文 円相にアの種子。逆修塔。阿
字観円成妙 大阿闍梨法印正舜禅定
門 文明十四年法印法王葱志 奉読
誦妙典、壹千部成就所 全者□□満
一切衆生仏道 敬白

板碑 (いたび) ブリタニカ国際大百科事典

板石塔婆，青石塔婆ともいう。主として供養，追善のために，種子（しゅじ）あるいは仏，菩薩の像，供養者，造立年月日，趣旨などを表面に刻した板状の石碑。多くは高さ1m内外，上頂部を三角に加工し，その下に2条の溝を入れている。その祖型は修験道の碑伝（ひで），あるいは五輪卒塔婆に求められている。ほぼ13世紀前半から16世紀末にわたって製作され，全国に分布しているが，関東地方に特に多い。

逆修とは

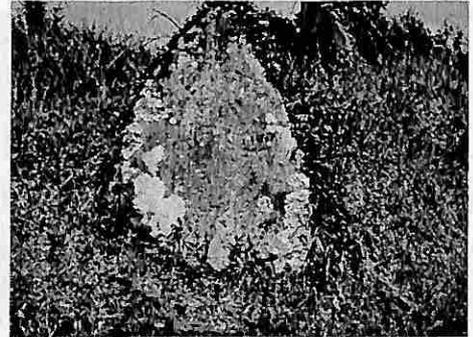
1. 存命中に自分のために仏事を修め冥福を祈る。
2. 一家縁者、眷族の物故者のためにその冥福を祈り供養をすれば、功德の多くは供養するものに報いられるという意味があります。



円相に「即」の上文字
 帰真 両靈位 忠仙蓮貞禪
 定門 心源妙法禪定尼
 (1571) 河野家墓地

板碑 (預修 逆修と同意) 1号基壇
 銘文 碑面にキリーク(阿弥陀如
 来)、サ(観音菩薩)、サク(勢至菩薩)

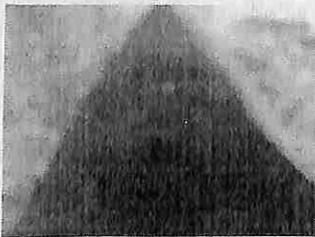
大僧都
 道俊和尚墓



阿蘇惟忠公墓 (1485)
 修造 (1815)
 正三位阿蘇前大宮司
 宇治朝臣惟忠卿之墓

円相にキリーク・サク・サの
 種子 虫誉声浄満禪定門
 位牌が下市妙景寺
 永禄十二年己巳七月廿四日
 死去 (1569) 西田家畑

円相にアの種子
 法印慈□ 西田家畑
 永禄三年正月二日
 (1560)



板碑 河野家墓地外 傍に五輪塔宝珠
 円相アの種子 法名「□□法印
 □□□」天正五年 (1577) 現在草陰で見えない



円相にキリーク・
 サク・サの阿弥陀
 三尊種子
 花□妙□禪定尼
 永禄三年侯庚申
 十月二日没

片平共同墓地



板碑 上段円相

キリーク(阿弥陀如来)の種子
下段右「逆修」中「奉読誦法華妙典
二千部」右「宇治惟栄西禅定門、道
栄禅定門」「願以此功德普及施一切」
左「妙栄禅定尼」天文十五(1546)
「我守満安生皆共生仏道」「部集与
成禅定」「道公・道泉・妙善」

地藏菩薩

舟形光背の表に
「奉建立、寛保二
壬戌二月吉日」
(1742)

旧西田家北側崖の上
板碑 円相にアの種子

せんだい地藏と呼称 祭り 12月24日
板碑にタラークの種子 錫杖、刻銘あるが不明

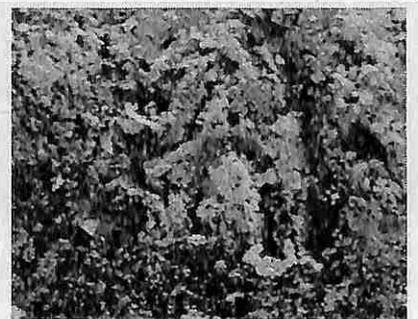
千体地藏



国郡一統誌「國郡寺社總録」益城郡「片平 福王寺薬師天台宗有天文年中論旨 廣巖寺観
音天台 忠光院地藏天台 華蔵寺勢至天台 石地藏千躰 専教坊」とある。
忠光院は阿蘇惟忠のこと 惟豊が父惟憲 祖父惟忠公の追善供養のため造立か(1548)

十三仏信仰における本地仏及び梵字

- | | |
|----------------|------------------|
| ① 初七日 不動明王 ウーン | ⑨ 一周忌 勢至菩薩 サク |
| ② 二七日 釈迦如来 バク | ⑩ 三回忌 阿弥陀如来 キリーク |
| ③ 三七日 文殊菩薩 マン | ⑪ 七回忌 阿閼如来 ア |
| ④ 四七日 普賢菩薩 アン | ⑫ 十三回忌 大日如来 バン |
| ⑤ 五七日 地藏菩薩 カ | ⑬ 三十三回忌 虚空蔵菩薩 |
| ⑥ 六七日 弥勒菩薩 ユ | タラーク |
| ⑦ 七七日 薬師如来 バイ | |
| ⑧ 百日 観音菩薩 サ | |



梵字

キリーク 阿弥陀如来



円相にキリークの種子
「阿弥陀仏」の名号
花散霊□□天文十八年
己酉六月廿四日 (1549)



円相にキリーク・サク・サの
阿弥陀三尊種子
奉読誦大乘妙典壹千部入塔



円相にタラークの種子。
誦法妙典三千部□□
天文十八年己酉八月
(1549)



円相にアの種子。逆修
花散霊□□天文十八年 己酉六
月廿四日 (1549) 奉読誦大乘妙
典壹千部□□ 阿弥陀経 紀年
名不明

仏教の諸尊を梵字一文字で表したものを種子(しゅじ)といいます。

阿弥陀如来 (キリーク・キリク) 胎蔵界大日如来 (ア) 聖観音菩薩 (サ)
千手観音菩薩(六観音) (キリーク・キリク) 勢至菩薩 (サク) 虚空蔵菩薩 (タラーク)

光厳寺

(矢部町観音堂巡り
7番札所)



光厳寺全景 阿蘇惟憲の追善
供養のため建立か 1700 再興



碑「猿田彦御尊、
大物御師尊」
(1833)



碑「靈巖も新たなりけり片平の
春の都も近くなりけり」

「庚申塔」中国の道教にある「三尸(さんし)説」から「庚申待(こうしんまち)」とか「宵庚申(よいこうしん)」といわれる行事が行われ、その供養塔として建てられたものです。

「三尸説」とは、人の体に住んでいる「三尸の虫」が庚申の日の夜、人が寝ている間に天に昇り天帝にその人の悪行を告げるので、そのためその人の寿命を縮めるというものです。この「三尸の虫」を天に昇らせないため、その晩は寝ないで一夜を過ごす行事が行われ、この行事を「庚申待」「宵庚申」などと呼んでいます日本では、平安時代の初期に庚申の日の行事が宮中や貴族の間で行われたのが最初とされ、庚申の日の夜は歌合せや、碁やすごろくをして楽しい一夜を過ごし、これを「守庚申(まもりこうしん)」と言っていたようです。

民間には室町時代に広まり、そのやりかたは仏教的なものとなり、如来菩薩などを拝み経文・真言を唱え、酒や雑談で一夜を明かすようになります。この庚申待は、江戸時代に各地で盛んにおこなわれるようになり、このかたちが現代まで続いたようです。

民間で行われるようになり、最初の「庚申待」や一定期間の庚申待を無事行ったのを記念して庚申塔が造塔されるようになりました。

室町時代には当時供養塔としててられていた「板婢」と結びつき、庚申供養の文字が板碑に刻まれたり、比叡山の天台宗の守り神・山王の使いの猿と庚申のサルとの関連から山王と庚申が習合して、山王二十一社本地仏種子字を刻んだ庚申供養の板碑が現れるなど、のちの庚申塔隆盛の母体がこの時期に造られました。安土桃山時代になると急速に板碑は消滅し、それに伴い庚申塔も造塔されなくなりました。

江戸時代初期に種子字を小さく刻む文字主体の板碑型の庚申塔があらわれ、次いで青面金剛の名や猿が登場し、少し遅れて三猿も現れました。これらは真言・天台などの密教系の創案で庚申塔発展に大きく貢献しました。

寛文年間になり青面金剛像を本尊とする庚申塔が現れて普及しはじめ、元禄を頂点として青面金剛の庚申塔が最盛期をもたらしました。

その後造塔は仏家の手を離れ、猿田彦が登場、庚申塔の道標が作られるようになり、末期には庚申塔の文字だけが刻まれたものが増えていきました。江戸末期までは多く造塔された庚申塔ですが、明治初期の廃仏思想や生活環境の変化に伴い減少して行きました。

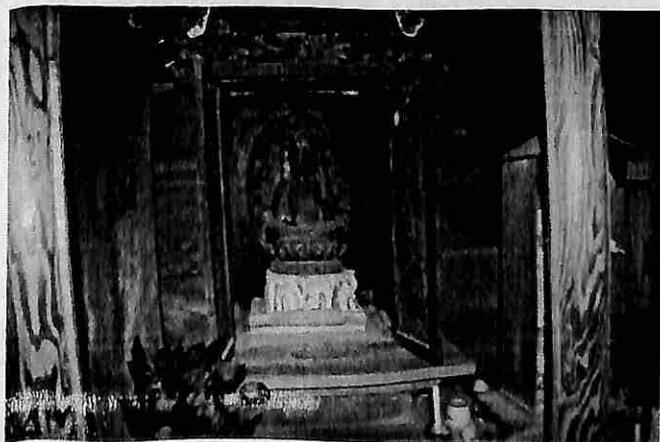
参考文献：「庚申塔の研究」(清水長輝著 名著出版 昭和63年発刊)



灯籠竿石
(1845)
灯籠残欠
(1864)
宝篋印塔



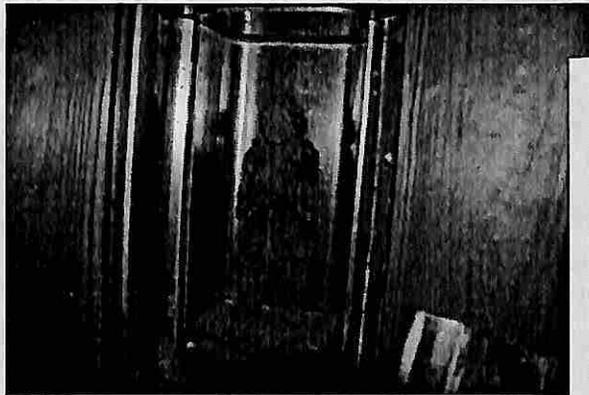
板碑(逆修供養塔)「奉書写大乘妙典十一部、読誦2千部 (1749) 施主 自者住信院謂尤安為口升」



真言
オン ロケイジ
ンバラ キリク
オン マカ
キャロニキャ
ソワカ

十一面観音様 苦しんでいる人をすぐに見つけるために頭の上に11の顔があり、全方向を見守っています。またそれぞれの顔は人々をなだめたり怒ったり、励ましてくれたりするといわれています。十種勝利（現世利益）と四種果報（死後成仏）という様々なご利益があり、千手観音菩薩と並んで人気の高い観音である。六観音の1つに数えられ、修羅道に迷う人々を救います。奈良時代から多く信仰されるようになり、延命、病気治療などを願って多く祀られるようになりました。

頭上面のうち前3面を菩薩面、左3面を瞋怒面、右3面を狗牙上出面、うしろ1面を大笑面といい、頂上に仏面を配して11面です。 祭り 12月18日



金剛力士像 様々な災難、病気治癒、財福授与、勝利を得るなどの現世利益があり、延命、地獄に落ちない、極楽浄土に行けるなど
祭り 12月17日



毘沙門天



不動明王 金銅仏
本仏は盗難のため
昭和30年代購入



地藏像



地藏像



水盤(手洗鉢)1706

片山家裏山崖にある地蔵像と片山家下にある板碑



崖下にあるお地蔵様



板碑



片山家元蔵前にある庚申板碑
三体 無銘 建造年代不詳

法印豪忠の墓(元福王寺跡)



無縫塔(法印豪忠の墓)礎石にアंक(胎藏界・大日如来)



板碑 アの一尊種子
法名、紀年銘不詳



無縫塔 銘文なし



墓所基壇



板碑
円相にアの一尊種子
花翁道遊禅定門
(1582)



板碑 円相にアの
一尊種子
月清妙心禅定尼
(1575)

福王寺墓地 (城ノ平) 矢部中テニスコート南台地

現矢部中の台地に当時小高い尾羽根の頂上に歴代住職の墓地があつた。昭和61年、敷地造成のため削られ、残った一部を平坦にして新しく墓地が造成された。左右2列20基の墓碑がある。右列奥から順に、そして左列奥から順に。



板碑 アの種子 法名「法印扶鎮」紀年「慶長十六天辛亥(1611)この墓地で最古



法名 権律師唯乗坊弘教和尚
紀年 明治十四年巳年七月
14日 行年五十歳 世話人
西田林太郎 墓最大の碑

アの種子 法名 堅者法
印常寿院 弘海大和尚
紀年 嘉永四辛亥六月朔
日(1851) 寿為、福王寺
中興 小国産

春月妙仲信女
(1719) 逆修塔



アの種子 法名
「権律師修殉覚
位」記念銘「宝暦
十三癸未」



左列奥



法名 三部都法千乗坊弘全
(1848) 福王寺改築

アの種子 法名 秀智大徳
(1789) 塔身中折れ



アの種子 頭密伝燈堅者大阿
闍梨円光院豪堅法印大和尚位
吳位 (天和二壬戌年 (1682))

板碑 逆修 2つに折れている アの
種子 法名「三部都法堅者大阿闍法印
嘉祥院豪伝口井」逆修 紀年銘「享保
四己亥天」(1719)



アークの種子
権律師覚懿靈位文化十三丙
子天 (1816) 台石に福王寺先
住、阿蘇山、長善坊、弟子正
因坊、行年五十六歳とある



昭和 61 年
矢部中グラウンド
工事の福王寺墓地
移転時の様子



平成 2 年 5 月
草刈前(左)と
整備後(上 3 枚)

風の神 境ノ谷 元、松の大木が神木 現在ソヤの木 祭り 二百十日(9月1日頃)



福王寺の僧侶

NO	僧侶名、法名	紀年銘	資料区分	備考
1	俊養法師	天長 5 年 (828)	肥後国誌	福王寺開基
2	弁恵	天文 18 年 (1549) 8 月 14 日	矢部風土記	金子 1 万匹京都へ
3	法印豪忠	天正 3 年 (1575) 11 月 1 癸 8 日	位牌 墓碑	同上説もある
4	法印挾鎮	慶長 16 年 (1611) 9 月 9 日	墓碑	福王寺墓地最古
5	円光院豪堅法印	寛文 3 年 (1663)	改築供養板	現福王寺地に再興
6	同上	天和 2 年 (1682) 5 月 16 日	墓碑	福王寺墓地
7	法光院豪秀	元禄 13 年 (1700)	石造物	福王寺三宝 荒神
8	嘉祥院豪伝	享保 10 年 (1725) 正月 9 日	板碑	福王寺墓地
9	権律師修殉	宝暦 13 年 (1763) 7 月 18 日	墓塔	々
10	秀智大徳	寛政元年 (1789) 6 月 10 日	々	々
11	権律師覚懿	文化 13 年 (1816) 8 月 12 日	々	々
12	千乗坊弘全	嘉永元年 (1848) 9 月 29 日	々	々
13	常寿院弘海	嘉永 4 年 (1851) 6 月 1 日	々	々 福王寺中興
14	唯乗坊弘教	明治 14 年 (1881) 7 月 14 日	々	々
15	法印亮観	明治 29~33 年ごろ	石造物	福王寺境内
16	内柴弘俊	明治 39 年ごろ	々	々
17				
18	藏原正俊	S4. 9. 25-		
19	守 了忍	S19. 5. 28-		
20	大藤了俊	S20. 1. 6-		
21	藤本道俊	S35. 12. 5-	S 53. 3. 5 没	華蔵寺
22	河内惠州	S53. 11. 21-		福城寺
23	河内真恵	H19. 4. 11-		

城平の地名 城平の村名は明治 9 年 7 月 13 日に、南北朝期の片平村と江戸初期の下大川が村合併してできた村名である。

城平地名の由来は三つの考え方、一つ、阿蘇地方の豪族であった阿蘇氏が、その勢力を強めて南郷谷から矢部に新駐してきたという考え方。それは南北朝期に北朝方の北条氏の勢力に押されて矢部に移駐し、その本拠地として「浜の館」をこの地に設置した。その時期は阿蘇惟次の承元元年 (1207) の頃だという説、延元元年 (1336) の惟時の頃だという二つの説がある。

「浜の館」について、「肥後国誌」に、矢部荘今村の項で「陣ノ内浜御所迹、浜ノ御殿トモ云、長福寺村陣ノ内云所ノ平原北高クシテ上へ平カ也、是を城ノ平ト云・・・」と記されている。この城ノ平が城平になったのかもしれない。

また明治九年、大村制の実施によって「城ノ平」と「片平村」の「城・平」の合成地名とも考えられる。

もう一つの考え方は、地元古老が語ったように、矢部中学校敷地一帯が「城ノ平」の字名である。運動場の南西端は急傾斜地形となっている。その中腹に唯一の水の湧き出るところがある。中学校敷地造成の頃までは、湧水地より下段は棚田が拓かれ、上段は畑地であったという。なぜこの台地が地籍図の「城ノ平」なのか、私はこの一帯の地形、地況を表現した地形地名とも考えている。「じょうひら、じょうのひら」は、元は「しょうずひら、しょうずのひら」ではなかったかと思っている。「しょう、じょう」は色々な意味もあるが、ここでは湧水、泉と

関わった語で、水の湧き出る所、泉、浄水を表した語ではないか。「ひら・平」は平らという意味と傾斜地をいう意味である。

この付近には「脇」地名など水が湧く地名や「本坪、津田(俗称)」など窪地、壺穴状地形や崩壊地形などがある。

また、「かたひら・片平」地名も地形地名で、一方が山とか崖に臨み、一方は平地、あるいは傾斜地となった所をいう。

以上地名の由来に三つの考え方を述べたが、どれが真実に一番近いものか断定できない。ただ江戸期から「じょうひら」という話し言葉に「城」の漢字を充当した根底に往古の浜の館、岩尾城の存在が住民意識の中に息づいていたのであろう。

片平の歴史(後世に編纂された編物、物語、伝承によるもの)

天長五年(825) 福王寺、俊養開く。(由緒書)

寛弘三年(1006) 矢村社創建。(由緒書)

承元元年(1207) 惟次、南郷谷より矢部浜の館へ。(阿蘇家伝) (阿蘇文書)

正平九年(1354) 「肥後野(矢)部郷村注文」に「かたひらの分6貫500文」とある。

慶長元年(1596) 元白小野妙ヶにあった禅宗無音寺を当地に移し延隆寺開基。

寛永11年(1634) 「肥後国郷帳」に「片平村118石余、下大川村299石余」とある。

寛文9年(1669) 「国郡一統誌」

明和2年(1765) 「肥後国誌」に「片平、174石余、小村・・福王寺」

文政8年(1825) 「益城郡手鑑」に「片平、174石余、田4町9反余、畑8町7反余、戸数22戸、人口90人内男70・女79、牛48匹、馬52匹、庄屋平右衛門」とある。

明治9年(1876) 片平村・下大川村合併し城平となる。

(参考 倉岡良友氏 平成3年6月15日発行 「城平の歴史と信仰風土記」 山都町図書館 所蔵)

参考 日本史との比較

	時代区分	日本全国の出来事	片平、阿蘇家関連
805年	平安時代	最澄が天台宗を開く	828年福王寺開基
1192年	鎌倉時代	頼朝、鎌倉幕府開く	1222年阿蘇氏が矢部に本拠地
1224年		法然の弟子の親鸞が浄土真宗を広める。	
1338年	室町時代	足利幕府を開く	惟忠 1485 死去
1573年	安土桃山時代	室町幕府滅亡	惟豊 1543 阿蘇家最大領地
1586年		秀吉、太政大臣に	1585 天正13年目丸山逃避 1592 文禄2 阿蘇家滅亡
1603年	徳川時代	家康、幕府を開く	1663 福王寺現在地再興 1682 片平井手
1716年		吉宗、享保の改革	1700 手足荒神築造
1853年		ペリー来航	1826 文政9年矢部手永手鑑 片平戸数22、人口90人 1842 豪潮塔 1851 福王寺中興 1854 通潤橋架橋
1868年	明治時代	明治維新	明治4年片平、11区下大川へ 明治11年城平へ郡区町村編成 明治22年浜町村 明治45年浜町
1912年	大正時代		
1926年	昭和時代		昭和30年矢部町発足

阿蘇家について

○阿蘇氏の歴史

阿蘇氏は、肥後国一の宮の大宮司職を古代よりつとめてきた。『阿蘇宮由来記』によれば、その先祖は神武天皇の皇子神八井耳（かむやいみみ）命とされ、第二代天皇の綏靖天皇の同母兄にあたるという。その後、神八井耳命の子健磐龍（たけいわたつ）命が阿蘇に封じられ、命は阿蘇都彦と称して阿蘇に土着し、その子速瓶玉（はやみかたま）命が阿蘇国造に任ぜられ阿蘇の姓を賜ったのだという。『古事記』に見える「阿蘇君」は、阿蘇都彦のことであるといわれている。このように阿蘇氏のはじめのころは神話に彩られ、「神々の末裔」とよばれるにふさわしいものである。とはいえ、阿蘇氏は日本が統合される以前の阿蘇地方（小国家）の首長で、大和朝廷がなったのちに氏姓制度下において阿蘇姓を称し、肥後国阿蘇国造に任じられ阿蘇地方を支配した。また、律令制下の郡司の伝統も負い、火の山阿蘇山を祀る阿蘇神社の建立により、代々その祭祀を司った氏族である。

○阿蘇氏の発展

古代、火山活動は人々に畏怖と恐怖を抱かせ、火山の神は国家の変災を予知する靈威をもつと信じられた。また、平安時代は陰陽道によって吉凶が占われ、祈祷仏教が盛んとなり、天変地異を予感させる火山信仰が盛んとなっていった。阿蘇神社は火山神の祭祀社として重用視されるようになり、やがて地方神より国家神として祭られるようになった。一方、阿蘇氏はこのようななかで、阿蘇山の異変を事あるごとに中央へ報告し、神の位を上昇させ、中央貴族との結び付きを深めていった。

そうして、阿蘇氏は神社の司祭と造営を掌るだけの「神主」から、司祭と造営に加えて社領をも管理する「大宮司」へと転化した。それは、延喜年間（901～22）の友成のときであったといい、阿蘇友成は謡曲の「高砂」の主人公としても知られた人物である。

大宮司職の補任は、律令下にあつては神祇官を経て太政官符が発せられ、国司によって執行されるという国家的な権威を備えたものであった。すなわち、阿蘇氏は大宮司職に任ぜられることで、その地位は国家権力を背景とするものとなったのである。また阿蘇神社の社領を、村上源氏を通じて皇室に寄進し、皇室領荘園と化した阿蘇荘の荘官職をつとめた。さらに、甲佐神社、健軍神社、郡浦神社などを末社に組み込むことで荘園の拡大を図り、阿蘇氏の勢力は肥後平野にまで及ぶようになった。併せて阿蘇南郷十ヶ村を私領とし、それを基盤に大宮司を頂点とする武士団が形成されていったのである。

皇室領の阿蘇荘は領家としては村上源氏を仰いでいたため、平氏政権が成立すると、平家は阿蘇氏を警戒するようになった。このことが、源頼朝が旗揚げしたとき、阿蘇氏が菊池氏、緒方氏らとともに頼朝に味方する要因となった。

鎌倉幕府の記録である『吾妻鏡』には、阿蘇惟泰が「南郷大宮司惟泰」と呼ばれており、このことは惟泰が武士団の棟梁として、南郷に居館を構えた領主であったことを示している。やがて、惟泰の子の惟次の代の承元元年（1207）、阿蘇氏は南郷から矢部に移り、貞応元年（1222）に岩尾城、愛藤寺城を築いて矢部が阿蘇氏の本拠となった。

【参考資料：矢部町史/熊本県史/戦国大名系譜人名事典 ほか】

○阿蘇惟豊

明応2年(1493年)、阿蘇氏当主・阿蘇惟憲の子として生。

永正2年(1505年)、肥後守護の菊池氏を乗っ取った兄・惟長(菊池武経)に家督を譲られ、当主となる。ところが永正10年(1513年)、阿蘇氏当主への復帰を目論んだ惟長の攻撃を受け、日向国へ逃れる。高千穂鞍岡の国人・甲斐親宣の支援を受け、永正14年(1517年)に阿蘇氏の本拠地・矢部を奪還する。その後も惟長とその子・惟前と抗争を繰り広げ、天文12年(1543年)に堅志田城を落として惟前を敗走させ、30年に及んだ阿蘇氏の分裂に事実上の終止符を打った。

天文18年(1549年)、朝廷に御所修理料として1万疋を献納し、後奈良天皇から従二位に叙せられた。また天文9年(1540年)、後奈良天皇宸筆の「般若心経」を受納し、阿蘇上宮に社納したという。娘が大友家重臣入田親誠に正室として嫁いでいたため、二階崩れの変で主家を追われた親誠を保護したが、同事件の元凶の一人であった事を嫌って天文19年(1550年)に誅殺している。永禄2年(1559年)、死去。墓地は熊本県山都町下市の通潤橋や岩尾城がよく見える位置にある。

○惟忠

応永22年(1415年)、阿蘇惟郷の子として誕生。

正長2年(1429年)、肥後国守護・菊池持朝が烏帽子親となり元服する。永享3年(1431年)、父・惟郷から家督を継ぐ。益城郡を支配するが、阿蘇郡を支配した南朝方の阿蘇惟武の孫・惟兼と対立。宝徳3年(1451年)、惟兼の子・惟歳を養子とする事で両家の和平が成立し、阿蘇・益城両郡の政治的、宗教的支配者の地位を得る。同年、家督を譲った。

寛正2年(1461年)、肥後守護・菊池為邦から、八代郡内海東を宛がわれる。晩年は惟歳と対立し、文明16年(1484年)、馬門原の戦いで惟歳と交戦し打ち破った。翌文明17年(1485年)、死去。

○惟憲

阿蘇惟忠の子として誕生。父・惟忠の養子となった阿蘇惟歳及びその子惟家と当主の座を巡って対立。文明16年(1484年)、馬門原の戦いで惟歳父子を打ち破り、南北朝時代から続く阿蘇氏の内部分裂に終止符を打った。惟豊の父。光厳寺はその供養のため建てられたか。

○阿蘇氏の滅亡

天正13年(1585年)、鉄砲という新兵器を持った島津軍が人吉の相良氏を降伏させ、間髪入れず阿蘇氏の領内に侵入してきた。武力に劣る阿蘇勢は総崩れとなり、肥後中部に多数あった阿蘇氏の城はことごとく陥落してしまった。わずか2歳の当主・阿蘇惟光(惟種の子)と弟、母親は側近たちに連れられて、九州山地のなかでも山深い・目丸(山都町・内大臣入口付近)に逃走した(阿蘇合戦・阿蘇の目丸落ち)。

惟光を匿った目丸地区では、村人全員が島津軍の襲撃に備え男は「棒術」を、女は「薙刀」を身につけたといわれる。今日、これが郷土芸能「目丸の棒踊り」(山都町指定文化財一覧)の起源とされている。目丸は平家の落ち武者伝説が今も残っているところで、緑川と内大臣川の深い渓谷が横たわり、人里離れて隠れるには格好の場所であった。

阿蘇領内の諸将が悉く島津氏の軍門に下る中、天正14年、類縁にあたる大友氏との関係を保ちながら北上する薩摩勢に対し一貫して防戦してきた阿蘇家の大将高森惟居が切腹し、肥後国における最後の砦であった高森城は落城した。これにより島津氏による肥後全土の平定は完了した。ここに九州内で名家・戦国大名として一目置かれていた矢部阿蘇氏は滅亡した。